

メアリ・シェリーの 『フランケンシュタイン』における男同士の絆

細川美苗

地の果てまで追いかけあう二人の男の物語でありながら、これまで *Frankenstein* はクイア批評という観点から論じられることは少なかった。小説を対象とする現代批評は、フェミニズム、ポスト・コロニアリズムなど文学作品とイデオロギー・権力との関わりを論ずる立場が流行している。『フランケンシュタイン』の解釈もその線上にあり、作者が女性である点や、主要テーマが出産にかかわるものであることから、フェミニズムの観点から論じられることが多い。「性」について Michel Foucault は、政治とは無関係の私的領域ではなく、主体化にかかわる権力の根幹であると論じ、それを受け、「性」や「ジェンダー」がイデオロギー上の構築物だということは、おおよその共通認識となっている。クイア批評では、同性同士の関係が、社会においてどのように概念化され位置づけられるのかを論じている。

Eve K. Sedgwick の著書『男同士の絆：イギリス文学とホモソーシャルな欲望』（以下『男同士の絆』）は、ロマン主義時代以降明確に現れる男性が同性へ向ける欲望とそれに対する嫌悪感に着目し、男性同性愛の欲望を父権社会に対立するのではなく、そこに内包されるものとして定式化している。セジウィックは男同士の絆を、性的な関係を含む、より大きな関係性と捉え、ホモソーシャルという用語で説明している¹⁾。ホモソーシャルというのは、男同士が女性を排除して築き上げる男性コミュニティーであり、René Girard による欲望の三角形、また Claude Lévi-Strauss による男性間での女性の交換に基づく親族形成、また Sigmund Freud のエディプス・コンプレックスを援用してセジウィック

クは議論を展開している。

ジラールは、一見欲望の対象であるかのような女性をめぐる男性同士のライバル関係が、実は二人の男の絆の強さを示すものであると指摘している。また、レヴィ＝ストロースも、婚姻をめぐる男女の関係で結ばれるのは、二つの家族の家長である男同士だと説明している。このように一見すると異性愛関係であるように見える人間関係に埋め込まれた同性の絆に着目しつつ、セジウィックはフロイトを持ち出し、息子が異性愛者になるには父親と同一化せねばならず、同性愛者になるには母親との同一化を果たすという点で、異性愛に埋め込まれた同性間の絆の強さを指摘している。彼女の論の中心は、異性愛と同性愛は対立する概念ではなく、異性愛社会である父権制は、その成立において男性同性愛を構造上含んでいるという点である。「男性にとって男らしい男になることと『男に興味がある』男になることの間には、不可視の、注意深くぼかされた、常にすでに引かれた境界線しかない」（セジウィック『男同士の絆』137）のであり、男同士の憧れと欲望を分かち境があいまいで恣意的だからこそ、父権社会においては強烈なホモ・フォビアが蔓延していると結論している。異性愛に埋め込まれた同性愛志向については Judith Butler も論じており、自我形成において最初に禁止されるのは近親相姦の欲望ではなく同性愛欲望であるとしている。バトラーは『ジェンダー・トラブル』において、ジェンダー・アイデンティティーはある欲望を禁止する原因ではなく、欲望を禁止した結果として生成すると指摘しており、同性の親に対する欲望の禁止を内面化し、禁止によって失われた欲望の対象と同一化することによって、異性愛者としてのジェンダーが構築されると述べている。以上紹介した思想家たちは、多少の相

1) ホモソーシャルという言葉は男性同士の絆により広がる社会を指し、一般的にはホモセクシャルな関係や社会とは区別されるが、セジウィックは両者を「潜在的に切れ目のない連続体を形成している」(2) という仮説により論じている。つまり、異性愛社会である父権社会に内包され、それを支える絆、たとえば会社や軍隊、政界、社交界などで結ばれる男同士の絆の根底にはホモセクシャルな欲望が潜んでいるということである。本論においてもホモソーシャルという言葉はセジウィックが使用する意味で用いる。

違を含みながらも、異性愛体制の中に埋め込まれた同性愛の欲望を読み取るという点で大まかに一致している。

Frann Michel は『フランケンシュタイン』に登場する女性登場人物に焦点を当て、女同士の絆という観点からクイア批評を用いて解釈している。18世紀終盤のイギリスにおいてはロマンティック・フレンドシップという女性間の特別な関係があり、二人の女性の社会階級、人種、ジェンダースタイル（ミシェル 350）が異なる場合には、その関係は社会的嫌悪の対象となった²⁾。実際メアリの母親である Mary Wollstonecraft は Fanny Blood という彼女自身よりも身分の低い女性と親密な関係にあり、二人の関係はウルストンクラフト最初の小説『メアリ』に表現されているとミシェルは指摘している。またミシェルは作者 Mary Shelley が『フランケンシュタイン』の構想を得たジュネーブ滞在中に S. T. Coleridge の詩 ‘Christabel’ が朗読された時、夫シェリーが過剰な反応をした点を取り上げ、「クリスタベル」が女性同士の関係にまつわる詩であると論じたうえで、夫の反応は当時顕在化しつつあったサフィズムに対する恐怖心であるとしている。『フランケンシュタイン』に登場する女性たちは、その同一性がしばしば取り上げられるが、ミシェルはむしろ彼女たちが互いを欲望し同一化を果たそうとするものの、両者の間に存在する差異を第三者に看破されることによって、社会が嫌悪する危険なサフィックな関係へと変貌すると論じている。

男同士の絆に注目したのは Eric Daffron である。ダフロンは政情が不安定であったナポレオン戦争期にホモ・フォビアが強まったという事情や、シェリーが夫と共に古代ギリシャの同性愛に関する書物を翻訳していたこと、夫シェリーが 1818 年に “A Discourse on the Manners of the Ancients: Relative to the Subject of Love” を執筆している点を指摘し、シェリーが男性同士の結びつきに関して無知ではなかったとしている。1816 年にバイロンが英国を後にしたのは、キャロライン・ラムがバイロンの同性愛の事実を公にすることを恐れて

2) 詳しくは文献リスト中、川津を参照。

いたという事情もある。いうまでもなくその年、ジュネーヴ・レマン湖畔のバイロンの別荘にて『フランケンシュタイン』の執筆が始まっている。シェリーの夫パーシーは1818年12月22日、トマス・ラヴ・ピーコック宛にバイロンの同性愛傾向を匂わせる手紙を書いている。

L [ord] B [yron] is familiar with the lowest sort of . . . women the people his gondolieri pick up in the streets. . . He associates with wretches who seem almost to have lost the gait & physiognomy of men, & who do not scruple to avow practices which are not only not named but I believe seldom ever conceived in England. He says he disapproves [sic], but he endures. (quoted in Crompton 243-44: 強調加筆)

この手紙についてクロンプトンはこのように述べている。

This letter has caused much speculation. The second sentence appears at first to refer back to the “women,” but the reference to “wretches who seem almost to have lost the gait & physiognomy of man” suggests a circle of effeminate males whose mannerisms and make-up mimicked women. It has usually been taken to refer to a homosexual coterie. Were these men or transvestite street boys? (Crompton 244)

『フランケンシュタイン』の構想に大きく関わったバイロンの同性愛的志向に関しては疑う必要はないだろう。

『男同士の絆』においてセジウィックは『フランケンシュタイン』をゴシック小説のサブグループであるゴシック・パラノイア小説と位置づけている。彼女は精神分析理論の中でも特にゴシック小説と関係が深いのは「フロイトがシュレーパー博士の症例研究をふまえたうえで打ち出したパラノイアについての見解」(139) だとしている。シュレーパー博士の症例とは、男性同性愛者が自分の欲望を抑圧した結果、愛する男性を迫害者と認識するもので、その特徴は「ある男性がほかの男性から迫害を受けるばかりか、その男性が相手に見透かされ、しばしば相手の衝動に抗えなくなる様子が描かれる点」である。セジ

ウィックは「仮にフロイトに倣って、こうした迫害意識を、同性愛的（あるいはそうとまでは言わなくとも、ホモソーシャル的）欲望に対する恐怖と妄想が混じった一種の拒絶反応と捉えれば、これらのサブグループの小説はホモフォビアのメカニズムを強烈に具現しているといえるだろう」（140）と述べている。つまり、自分の持つ同性愛的欲望を恐怖し、これを抑圧して外在化させることにより、迫害する他者として自分の愛する相手を認識するのだ。フランケンシュタインにとって怪物は行く先々に現れ彼を迫害する者である。フランケンシュタインにとって怪物は、彼の内に抑圧された同性愛の欲望が外在化したものであるとみなすことができるのだろうか。

もし怪物がフランケンシュタイン自身の恐怖心の投影なら、両者の関係は文学的には典型的なダブルであるといえる。ダフロンはフランケンシュタインと怪物に留まらず、本作品の主要男性登場人物の間に存在する共感がダブルの氾濫を招いていると指摘している。共感については以下で詳しく述べるが、その根本が他人の状況を自分のことのように感じる心であることから、共感がダブルへと行き着くことは理にかなっている。他人に共感する能力である鋭い感受性の持ち主にとっては、二人の人間の境界がまるで存在しないかのようだ。

当時ガルバーニ電気などにより生命を物体に伝達しようという試みの際、生命を活性化すると考えられた物質についてダフロンはこのように述べている。

“While these scientists, like Frankenstein, were playing God in willing life back into the dead, they used a force that supposedly animated all life and was called variously light, magnetism, electricity, and sympathy” (421)。生命を活気付けるとされた共感（sympathy）はフランケンシュタインから怪物へと流れる一方、フランケンシュタインと他の男性登場人物の間にも共有されている。これが登場人物たちを隔てる境界を崩壊させ、ダブルの氾濫を招き、分かり合う男同士の絆は友愛と同性愛が曖昧な場と化すとダフロンは論じている。

さらにダフロンはこのような個の崩壊と共感で結ばれる二者の調和を『フランケンシュタイン』の語りの構造にも読み取っている。作品は対話という確固

とした二者の対立構造をとらず、ある者の語りが他の語りを内包する形で移行していき、結局全ての語りが Walton の手紙へと集約されているからだ。手紙であるウォルトンの語りの最後にも署名や別れの言葉がなく、怪物の生死に関する判断は読者の解釈に委ねられている。このような個の境界の崩壊と共感によって結ばれる男性同士の絆と同性愛傾向を読みとることがダフロン論の中心である。

近代社会の出現は、私的な空間に追いやられた女性と公的な領域を支配する男性という空間の二分に基づいているということはよく知られている。男性の領域である公の空間においては、「最も密接な男性間の結束が規範であり、一方で（それと目立って同じ性質の）『ホモセクシュアリティ』は禁止の対象である」（セジウィック 『クローゼットの認識論』270）。フランケンシュタインは成長の過程で、家庭という私的な空間を離れて大学へ向かい、大学という男性のみで構成されるコミュニティで生命の秘密を見つける。G. S. Rousseau は17世紀までの劇においては同性愛はギリシャ的、牧歌的理想世界で女装した羊飼同士の喜劇として登場するが、18世紀劇では Garrick の *Miss in her Teens* に出てくる「女っぽいフリブルズ」（effeminate Fribbles）や Buckingham の *Tragedy of King Henry IV of France* に出てくる「フランス公爵」（French Dukes）へと変化すると述べている。18世紀に登場する同性愛を匂わせる登場人物の特徴の一つをルソーはこのようにまとめている。“The point is that the latter characters [18th century effeminate characters], whether merely homoerotic or homosexual, have met in school and awakened to ‘the dangerous love’ early in their lives”（Rousseau 142-143）。つまり、『フランケンシュタイン』出版時において、大学は同性愛の欲望に目覚めるお決まりの場所だったといえる。大学におけるモンスター完成の直前、フランケンシュタインはこのような感覚を示している。“my voice became broken my trembling hands almost refused to accomplish their task ; I became as timid as a love-sick girl, and alternate tremor and passionate ardour took the place of wholesome sensation and regulated ambition”（51 emphasis

added: Reiger, Thomas variant 1823)。なぜフランケンシュタインは自らを恋の病に落ちた「少女」と表現するのだろうか。また、途切れる声、震え、押さえ切れない情熱は、鋭い感受性の持ち主、つまり「エフェミネイト」(女っぽい)な人物の特徴である。同性愛恐怖と関連して、当時イギリス社会で恐れられた現象のひとつ、「エフェミネシー」は、18世紀終盤から19世紀初頭にかけての感傷小説の流行やマナー向上運動がもたらした新しい理想の男性像、洗練された男性という理想像の否定的側面である。そのような新しい男性の理想的姿について、同性愛との関係から Roy Porter が以下のように論じている。

The idealization of motherhood encouraged by sensibility likewise fostered the domestic doll's house atmosphere which threatened to smother the Victorian angel in the house. For men the implications were equally complex. Anxieties arose about 'effeminacy', and while sensibility was valued, it fuelled the growing dread of what was later known as homosexuality. (294: 強調加筆)

つまり、近代社会成立時における男の友愛とそれに付きまとう強烈なホモ・フォビアは、感傷小説が煽り立てた理想の男性像、感受性が強く共感しあう男たちと関連があるのだ。感傷小説の特徴は他人の不幸な境遇への共感であり、共感的な内面を表現するテキストの特徴は、言葉に詰まった主人公の感情の高まりを表現する横線ダッシュ (—) の多用が作り出す断片的なテキストと、そこで流れる涙の描写である。女性性のシンボルともいえる涙を、自らの優れた内面の証として流す感傷的な男が「エフェミネイト」であることは確かであり、上記の引用におけるフランケンシュタインが感じた自己像、健全な感覚と自制された野心という理性的部分を失い、幻覚と激しい情熱という感覚的、女性的な心因に支配された状態と一致している。

この理想的な男同士の繋がりを形成する他人への共感をもたらす女性化への恐怖感、同性愛恐怖として怪物に投影されているのだろうか。ルソーは18世紀半ばの同性愛に関する匿名の書き物を紹介し、当時同性愛をさす名がない

ばかりか、恐ろしい罪であるゆえに言語表現を超えた罪であると認識されていたことを紹介している。“It [i. e. homosexuality today] is yet without Name : What shall be then called ? There are not Words in our Language expressive enough of the Horror of it” (136)。上記の夫シェリーによるピーコック宛の手紙の中でも、同性愛は名指すことのできぬものと表現されている（強調部分）。フランケンシュタインが怪物を最初に見たときの言葉は、“How can I describe my emotions at this catastrophe, or how delineate the wretch whom with such infinite pains and care I had endeavoured to form ?” (60(1831))である。名もない怪物は、それを見たときの気持ちや、それ自体を言葉で言い表すことができない者である。怪物を言いえぬ恐ろしい同性愛の表象とするならば、言葉に詰まるフランケンシュタインは自己の内面にあるそのような欲望を見て驚く主体である。フランケンシュタインの持つ言葉にできないという感覚は、多感な人物に典型的な内面表現であり、当人の感情の高揚が言語表現の域を超えたことを示している。感情に圧倒された主体は、理性・言語対感情、男性対女性の二項対立という見地から考えれば、後者、つまり感情や女性の領域へと踏み込んでいるといえよう。

学校と同性愛の関連といえば、ウルストンクラフトもまた『女性の権利の擁護』で、寄宿学校で男子が身につける肉体的・道徳的悪徳に言及している。「たくさん少年たちが一つの寝室で雑居生活をしている時には、彼らはいやらしく下品な悪戯をも仲間から習わないであろうか。精神のデリカスイを身につけるのを確実に妨げ、しかもからだに悪いあの悪徳については、言うまでもないことであるが」(310)。父と婚約者の待つジュネーブへ帰ることなく、手紙も書かず、大学で研究に没頭するフランケンシュタインはそのような悪徳を身につけたのであろうか。彼は熱にうなされ、葉が散る音にも怯え、人を避ける様になる。

Every night I was oppressed by a slow fever, and I became nervous to a most painful degree ; the fall of a leaf startled me, and I shunned my fellow-

creature as if I had been guilty of a crime. Sometimes I grew alarmed at the wreck I perceived that I had become. (60(1831))

生命創造の秘密を知ることは、科学という男性のみに許された知によって人間の再生産を行うことを可能にする。もし、強制的異性愛システムが人間の再生産を目的としているならば、フランケンシュタインの得た知識は、当時は男性のみに許された科学技術の力で女性を介さず社会を再生産してゆく可能性を開く。フランケンシュタインの生命創造への執着は、男性のみで構成された社会への希求からくるホモソーシャルな欲望であり、さらには女性嫌悪と読み替えることも可能だ。その欲望が彼を社会から遠ざけ、罪ある者の様にさ迷わせるとしたなら、同性愛の欲望と解釈することも可能だろう。

さらに Alan Bray は同性愛について、「キリスト教徒が口にしてはならない」悪弊であったと指摘している (13)。フランケンシュタインの秘密も誰にも明かされず、読者でさえ知ることができないが、フランケンシュタインの日記を通じて、彼と怪物の間でのみ共有されている。この口にされずとも共有される知が同性愛的欲望を示すと考えるなら、従来の批評ではほとんど論じられてこなかった登場人物、アイルランドの治安判事 Kirwin に注目しなければならない。怪物がフランケンシュタインの幼馴染である Henry Clerval を殺した直後に、その遺体発見現場であるアイルランドの浜辺に漂流したフランケンシュタインは犯人とみなされ、治安判事の元へ連行される。フランケンシュタインを犯人だとする証言者も現れる。これは怪物によってフランケンシュタインの弟ウィリアムが殺されたときに、召使の Justine が置かれた状況と同じである。ジュスティーンは無実のまま処刑される一方、フランケンシュタインは無事解放される。これはカーウィン氏がフランケンシュタインに対して極端な好意を示す (Mr. Kirwin had shown me [Frankenstein] extreme kindness 154 (1831)) からだ。また、カーウィン氏はフランス語話者であり、フランケンシュタインが発するうわごとを彼のみが理解する (Mr. Kirwin alone understood me [Frankenstein] 153(1831))。二人だけが理解できる言葉で通じ合う点は興味深

い。ブレイによると同性愛者達はフランケンシュタインとカーウィン氏のように、仲間のみで理解できる隠語で意思疎通をしていたからである。

フランケンシュタインとカーウィン氏はフランス語で意思伝達を行うが、ブレイによるとイギリス人にとって「性的放埒の防波堤となるのは結婚」(ブレイ 43)であり、カトリックの聖職者が結婚しないことから、フランスと同性愛は強い連想で結ばれていた。また、同性愛は神がこしらえた自然からの逸脱行為であり、「秩序解体の一部」(42)として反逆者と関連付けられることが多かった(32)。小説の設定時期は18世紀終盤であり、イギリスによるアイルランド併合を目前にして、カトリック教徒解放を目的として組織されたアイルランド人連盟の活動が最高潮に達していたことを考慮すると、アイルランド在住のフランス語話者である治安判事はイギリス総督府に対する潜在的反逆者であり、イギリスがライバル国フランスに長年浴びせかけてきた侮蔑の言葉を使うと同性愛者ということになる。

そんなカーウィン氏は、フランケンシュタインの秘密を察することのできる人物である。以下が彼とフランケンシュタインのやりとりの一部である。

Mr. Kirwin entered. His countenance expressed sympathy and compassion ; he drew a chair close to mine, and addressed me in French—

...“Nothing indeed could be more unfortunate and agonizing than the strange chances that have lately occurred. . . . The first sight that was presented to your eyes was the body of your friend, murdered in so unaccountable a manner, and placed, as it were, by some fiend across your path.”

I also felt considerable surprise at the knowledge he seemed to possess concerning me. (155(1831))

誰もがクラヴァールを殺したのはフランケンシュタインだと思うなか、カーウィン氏は事実を知っているかのように、「悪魔」がクラヴァールの死体を浜辺に置いたのだと言い当てている。怪物には名がなく、フランケンシュタインは彼をしばしば「悪魔」と呼んでいる。フランケンシュタインはクラヴァール

に対して怪物の存在を仄めかしたが、クラヴァールがその真意を理解することはなかった。ジュスティース裁判に際して、フランケンシュタインは怪物が真犯人と気づくものの、自分の話は公表すべきものではない（“My tale was not one to announce publicly” 78(1831)）と考え、真相を明かさなかった。ジュスティースを見殺しにしてまでフランケンシュタインが隠し通している事情を、カーウィン氏は易々と察し、そのことにフランケンシュタインは驚いている。カーウィン氏はフランケンシュタインが無罪となるように奔走し放免している。しかし、カーウィン氏はフランケンシュタインの状況を察するものの、彼と怪物のみが知っている「生命の作り方」という秘密を共有していないことから、二人の関係は理解しあう絆に留まっているといえるだろう。

またフランケンシュタインは1831年版ではナポリで生まれたことになっている(42)。ブレイによると、カトリック教会との対立の中、イギリスでは「男好きなイタリア人」というイメージが一般的であり、同性愛をイギリスにもたらしたのはロンバルディア人であったとさえ考えられていたと述べている(130)。ルソーも17世紀イギリスで、男色は“‘Gothic’ vice”(137)、ゴート人、つまり、イタリア、ローマ人の、転じて野蛮な者たちの悪弊とみなされており、18世紀にイギリスへ渡った多くのカストラート（去勢した歌手）の流行も影響して、「イタリアはその後も男色の真の起源（the true home）と言われ続けた」(164)と述べている。

ここでしばしば指摘されているフランケンシュタインの勘違いについて検討したい。フランケンシュタインが製作半ばで怪物の伴侶を殺害した後、怪物はフランケンシュタインに向かいあの有名なセリフを言う。“I shall be with you on your wedding-night” (147(1831))。フランケンシュタインは怪物の伴侶を殺害したのであり、怪物はフランケンシュタインの伴侶となるエリザベスを殺しに来ると考えるのが普通である。なぜフランケンシュタインは怪物が自分に会いにくるのだと思い込み、エリザベスを一人部屋に残し彼女を見殺しにしてしまうのか。ブレイによれば同性愛者がたむろする「モリー・ハウスの一室は

〈礼拝堂〉と呼ばれ、その行為自体は〈結婚〉または〈初夜〉(148)とされていた。怪物の言葉は「お前の結婚式の夜に、俺はお前の傍に居る (“I shall be with you on your wedding-night”）」(147(1831))であり、プレイの指摘を考慮すれば、「お前が始めて性行為に及ぶ晩、傍に居るのは私であろう」とすることもできる。同性愛の欲望に駆られたフランケンシュタインは、彼は自分に会いに来ると思いついたのだとも考えられる。

空間の二分化に基礎をおく近代父権制社会は、男同士の結束に頼っているからこそ、行き過ぎた男同士の愛情を厳しく弾圧しなければならず、そのような規制は内面化され、人は自らのうちにある同性への愛情を嫌悪感を持って監視するようになる。男同士の絆の一方には父権社会において不可欠な要素である友情、もう一方には恐ろしい同性愛の欲望がある。その二つの感情を分かち境界の曖昧さが、自分の持つ同性への愛情を検閲する主体を構築する。このような父権制の課す自己検閲システムを反復するかのようになり、友情と同性愛恐怖はフランケンシュタインの内面で近似している。彼のイメージの中では自分を見つめる目として、親友ヘンリと怪物はついに連続性を持つようになる。

I saw around me nothing but a dense and frightful darkness, penetrated by no light but the glimmer of two eyes of Henry, languishing in death, the dark orbs nearly covered by the lids, and the long black lashes the fringed them; sometimes it was the watery, clouded eyes of the monster, as I first saw them in my chamber at Ingolstadt. (157(1831))

友への愛情が同性愛的なのではないかという恐怖が高まり、フランケンシュタインにとってクラヴァールの瞳は怪物の恐ろしい瞳と同じ位置を占めることになるのだ。

これは同性愛の欲望を極度に恐怖する主体の防衛反応であるパラノイア的強迫観念の特徴を示している。ヘンリの瞳から怪物の瞳への移行において、フランケンシュタインはまず、暗い闇の中に友人クラヴァールの瞳を認識する。そして自分を見つめ返すクラヴァールの瞳は、生命を得てゆっくりとまぶたを上

げ、初めてフランケンシュタイン見つめ返す怪物の瞳へと変化する。これは自分の対象に向かう愛情を、迫害者から自己に向かう欲望であると誤解するパラノイアの症例と一致する。フランケンシュタインは自分の友人に対する愛情が危険な境界を超えているのではないかという不安を持ち、それが対象から自分に向かう恐ろしい脅迫であると感じるのだ。

すでに述べたように、怪物も含めたこの小説における男性登場人物は、非常に類似している。ダフロンはフランケンシュタインと怪物の近似性を指摘し、モンスターがクラヴァールの後を追っているフランケンシュタインの後をつけている以下の場面において、犠牲者につきまとう脅迫者と共感する友人を守ろうとする者がほとんど区別できないと指摘している (426)。怪物はフランケンシュタインにこのように言う。“Depart your home, and commence your labours : I shall watch their progress with unutterable anxiety ; and fear not but that when you are ready I shall appear” (131)。フランケンシュタインはクラヴァールを守るためにこのような行動をとる。“I would not quit Henry [Clerval] for a moment but followed him as his shadow, to protect him from the fancied rage of his destroyer” (142)。結局クラヴァールは怪物に殺害されるのだが、その後フランケンシュタインにとってクラヴァールは決して目の前から消えない死体のイメージとなり彼につきまとう (The image of Clerval was for ever before me, ghastly and murdered (157(1831)))。クラヴァールのイメージは、実際死体でありフランケンシュタインにつきまとっている怪物と酷似している。

怪物とフランケンシュタインも、物語の最後には似た者同士となる。両者とも家族はなく互いに追いかかけあい、追う者と追われる者の役目を相互に果たしあっている。一番外側の語り手であるウォルトンとフランケンシュタインも類似している。ウォルトンはかつてのフランケンシュタインのように、未知の知識を求めて北極を航海しているのである。またアジアへの航路を求めるという点では、ウォルトンとクラヴァールは似た者同士である。

セジウィックは『クローゼットの認識論』において、一人の別な男性に対す

る愛情が、なぜ同一のものに対する愛、ナルシズムに似た自己愛になるのかを説明している。彼女は「私（男）は彼（男）を愛する」という、ホモ・フォビックな制度の下では語ることでできないセンテンスが否定される場合の、フロイトの四つのモデルに加えて、「彼 [フロイト] が明示しようとも思わなかったもの、そして男が男を欲望することの意味について、出現しつつあった「ホモ」の読み方の神髄にはるかに近いもの、すなわち「私は彼を愛していない。私は彼である」という文法」(228-229) を示している。このような定式に当てはめた場合、本小説における男たちの鏡像の氾濫は非常に興味深い。

フランケンシュタインが語らないのは、実は生命創造の秘密だけではない。彼は弟 Ernest の身の上についても堅く口を閉ざしている。しかし婚約者である Elizabeth の手紙は、アーネストが外国の軍隊に所属することを希望していることを示しており、廣野も指摘するように (232)、アーネストは自らの意思どおりに行動したと考えるよりほかない。フランケンシュタインの秘密を男性同士の絆を求める欲望の抑圧とみなした場合、それをフランケンシュタインの弟についての不自然な沈黙と関係付けるべきだろう。フランケンシュタインのうちで両義性を帯びた男同士の友愛と欲望は、横たわる男を見つめる男というイメージで繰り返される。まだ息のない怪物を見つめるフランケンシュタインと、それに続き眠るフランケンシュタインを見つめる怪物。病気になったフランケンシュタインを看病するクラヴァール。クラヴァールの死体を見つめるフランケンシュタイン。気を失ったフランケンシュタインを看病するカーウィン氏。最後にフランケンシュタインを看取るウォルトン。怪物とフランケンシュタイン以外の関係は、全て理想的な男同士の絆として描かれている。倒れる男とその人物をいたわる男のセンチメンタルな構図が示す男の絆と同性愛の欲望については、ダフロンがすでに指摘している。この執拗に繰り返されるイメージは、フランケンシュタインが知っていて語らないアーネストの身の上について多弁である。アーネストは男同士の絆が最も高く評価される社会、男の腕の中で男が死に絶えてゆくコミュニティーである軍隊に属しているのだから。男

同士の絆を求めながらも、その欲望を頑に抑圧しているフランケンシュタインは、弟の身の上について述べることができない。

さらに登場人物ではないものの、‘The Rime of the Ancient Mariner’（『老水夫行』）への言及も興味深い。ウォルトンは姉への手紙で「私は疲れはて悲しみに沈んだ『老水夫』のように帰宅するでしょうか」（33）と、おどけてみせる。フランケンシュタインも怪物を創造した直後に驚き部屋を飛び出し町をさまよう自分の姿を『老水夫行』を直接引用して表現している（62）。ルソーは“*It was common knowledge that sodomy was rampant at sea*”（146）と述べ、小説の舞台である18世紀後半にそのような認識が最高潮に達したとしている。

Almost every year, it now appears from printed court records, the public could read in newspapers about the court martials for sodomy, a trend that culminate in the sensational investigations of handsome young sailor who fell victim to evil force aboard the HMS *Indomitable* in 1797 (which so intrigued Melville), and of Captain Bligh and his mutineers on the HMS *Bounty* nine years earlier. (146)

1797年は小説が設定されている年である。コールリッジの詩に出てくる老水夫は、航海の途中に自然の秩序を逸脱した体験をして、その話を聞かせて回る。老水夫は自分の人生をウォルトンに語るフランケンシュタインであり、またフランケンシュタインから聞いた話を我々に伝えるウォルトンでもある。海上での超自然体験についての老水夫の話を聞いた若者は、友人の婚礼にいくはずであったが、老水夫の話を聞き終わるともう結婚式へ出席する気持ちになれない。彼は元の陽気な若者ではなく、水夫のように悲しみに沈んだ人物へと変わってしまう。つまり老水夫の秘密を知ることは、結婚に象徴されるような強制的異性愛に基づく父権社会への参加を拒み、そこに背を向ける人物になることである。フランケンシュタインは結局ウォルトンに生命創造の秘密を語ることはなく、そのような知識を得ることの危険を警告するに留まる。フランケンシュタインの警告を聞き入れたウォルトンは、理想的な友を求める旅をあきら

め、人知を超える知を求めることを断念し、姉の待つイギリスへ戻るようである。これは船上という男のみで構成される、自然とみなされた性差のバランスを欠いた不自然なコミュニティを離れ、異性愛に支えられた父権社会へ戻ることを意味している。

*本論は2006年度松山大学特別研究助成の成果である。

文献リスト

- Crompton, Luis. *Byron and Greek Love: Homophobia in 19th-century*. London: Faber and Faber, 1985.
- Daffron, Eric. "Male Bonding: Sympathy and Shelley's *Frankenstein*." *Nineteenth-Century Context* 21 (1999): 415-435.
- Maccubbin, Robert Purks. Ed. *'Tis Nature's Fault: Unauthorized Sexuality during the Enlightenment*. Cambridge: Cambridge UP, 1985.
- Michel, Frann. "Lesbian Panic and Mary Shelley's *Frankenstein*." Smith 349-367.
- Porter, Roy. *The Creation of the Modern World: The Untold Story of the British Enlightenment*. NY: Norton, 2000.
- Rousseau, G. S. "The Pursuit of Homosexuality in the Eighteenth Century: 'Utterly Confused Category' and/or Rich Repository?" Maccubbin 132-168.
- Shelley, Mary. "Frankenstein, or the Modern Prometheus." (1831) Smith 19-189.
- . *Frankenstein or, The Modern Prometheus: The 1818 Text*. Ed. James Rieger. Chicago and London: U of Chicago P, 1974. (1818 and 1823 texts)
- Smith, Johanna M. *Frankenstein: Complete, Authoritative Text with Biographical, Historical, and Cultural Contexts, Critical History, and Essays from Contemporary Critical Perspectives*. Second edition. Boston and NY: Bedford/St. Martin's, 2000.
- Wollstonecraft, Mary. *A Vindication of the Rights of Woman*. Ed. Carol H. Poston. A Norton Critical Edition. NY and London: W. W. Norton, 1988/1975.
- ウルストンクラフト, メアリ 『女性の権利の擁護』白井堯子訳 未来社, 1980
- 川津雅江 「ロマン主義時代のセクシュアリティとジェンダー—ランゴレーンの貴婦人たち(1)—」『人文科学論集』(名古屋経済大学 人文科学研究会) 75 (2005): 25-38
- 「ロマン主義時代のセクシュアリティとジェンダー—ランゴレーンの貴婦人たち(2)—」『人文科学論集』(名古屋経済大学 人文科学研究会) 76 (2005): 13-28
- セジウィック, イヴ 『男同士の絆—イギリス文学とホモソーシャルな欲望』上原早苗他訳

名古屋大学出版会，2001

- 『クローゼットの認識論—セクシュアリティの20世紀』外岡尚美訳，青土社，1990
- バトラー，ジュディス 『ジェンダー・トラブル』竹村和子訳 青土社，1999
- 廣野由美子 『現代批評入門—「フランケンシュタイン」解剖講義』中央公論社，2005
- ブレイ，アラン 『同性愛の社会史—イギリス・ルネサンス』田口孝夫ほか訳，彩流社，1993
- フロイト，ジークムント 「嫉妬，パラノイア，同性愛に関する二，三の神経症的機制について」『フロイト著作集』第六巻，井村恒郎・小此木啓吾ほか訳，人文書院，1970